



The Failure in Self-Formation in *The Bluest Eye*

2112012

甲斐彩乃

CONTENTS

- Toni Morrison、*The Bluest Eye*について
- あらすじ
- Thesis Statement
- Chapter① Parental Affection
- Chapter② The Ample Sensitivity
- Chapter③ The Sense of Solidarity
- まとめ・課題
- Works Cited

Toni Morrisonと *The Bluest Eye*について

- 1931-2019
- 黒人の虐げられた過去や歴史を掘り起こし、虐げられてきた人々の声なき声や文化を再構築する。
- 1940年代、まだ黒人に対する差別が続いていた時代を描いた作品。
- 青い眼に憧れる貧しい少女ピコーラが父親にレイプされ身ごもり死産して発狂する様子を描く。白人の価値観に押しつぶされてしまった少女を描く。



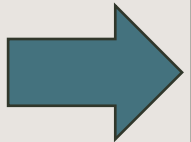
あらすじ

- ピコーラは11歳の黒人の少女であり、父親のチョリー、母親のポーリーンらはみな自身を醜いと思って生活している。チョリーには親がおらず、親の愛情を知らずに育った。また、ポーリーンは黒人であることに劣等感を感じながら白人家庭で働くことに誇りを持つことで自己卑下に陥っている人物である。ピコーラは自身が偏見、いじめ、家庭内暴力を受けたことによって、自分が美しく、「青い眼」を手に入れば自分の人生が変わり、愛される存在になれると信じている。白人社会が「美」として提示する基準に心が囚われ、自己価値を見出せなくなった少女である。
- ピコーラは父親のチョリーが家に火をつけたために住む家が無くなり、ピコーラの友人であるクロードディアの家庭で世話をしてもらうことになる。本作はクロードディアの目線でピコーラが受けてきた偏見やいじめなどが語られる。
- ピコーラは愛情の表現の仕方を知らないチョリーからレイプされ、子供を身ごもり、死産する。この出来事が彼女の精神的崩壊の引き金となった。

Thesis Statement

- 本論文はピコーラとクロードディアの育ってきた環境やその中で体感的に学んだことの違いから自己形成に影響があったのだと考え、その原因が何にあったのかを【両親からの愛情】【黒人特有の感性（ファンク）】【コミュニティとの連帯感】の視点から解明する。
- なぜ上記の視点を選んだか？

トニ・モリスンは作品を書いた理由として、社会の中で一番もろく、人種差別の対象となるのは黒人の女性や子供であり、彼らが家族やコミュニティからサポートを受けられなければ黒人女性や子供が精神的な死や自己嫌悪に陥るということを書きたかった、と振り返っている。



彼女の作品で家族やコミュニティというトピックは大きなテーマとして描かれている

Chapter① Parental Affection

〈ピコーラ〉

- 母親のポーリーンは白人文化に没頭している
- 裕福な白人のフィッシャー家で働いていて、そこで居場所を見つけたために自分の家族に対して無関心になっている **フィッシャー家の娘＞ピコーラ**
- ピコーラという名前は無意識に存在が無価値であるということを反映しているかもしれない

Chapter① Parental Affection

〈クロードィア〉

- 厳しくも愛情深い母親に育てられたクロードィア
- 子どものころは、大人は指図するばかりであまり話さないなど、厳しく育てられたが、愛情を感じながら育った
- “a productive and fructifying pain” (10) 大人になって、大人の厳しさが愛情の表れだとより一層認知するように
- クロードィアの母親の愛情深さ
- ふだんは納得いかないことに対してぶつぶつと文句を言うが、ピコーラに初潮が来たときは手当して、自分の行動の誤りを謝罪できる

Chapter② The Ample Sensitivity

- ・ クローディアは独特の感性を持っている人物

（例） クリスマスプレゼントには何かを所有するよりも感じたいと思う

→ 幸せは所有することではなく感じることであるという概念がある

その考えやbaby doll（白人文化の象徴）に対する疑問からクローディアはプレゼントにもらった人形を壊す

- ・ ピコーラは白人文化に対して疑問を抱くことはない

独特の感性を持っているかどうかも2人の大きな違い

最終的な2人の成長にも影響しているかも

Chapter② The Ample Sensitivity

- 独特の感性＝ファンク
- ファンク：黒人の持つ独特の概念や感覚を指す
- モリソンは多くの若い黒人女性はファンクの取り除き方を学ぶことを指摘する
➡ つつましさ、忍耐心、高度な倫理観、マナーなど
- “passion” “the funkiness of nature” “the funkiness of wide range of human emotions” (81)を取り除くことを学ぶ

Chapter② The Ample Sensitivity

〈ピコーラ〉

- ・ ピコーラの母親であるポーリーンも昔はファンクがあったが、大きな生活の変化によってポーリーンはファンクを失ってしまった人物。

In the South

- ・ ファンクがあった
- ・ チョリーと出会った時のことを色彩豊かに表現
- ・ 汚れやシミを忌み嫌う様子はない

- ・ ピコーラにもファンクがあるとは考え難い

フィッシャー家でブルーベリーのジャムをこぼしたとき、母親から床を汚したことを怒られる

→ 汚れは嫌われるべきものだと教わる

白人文化に没頭すると同時に自己卑下を学ぶ

In the North

- ・ 今までより多くの白人に囲まれて生活するようになる
- ・ She was not “*used to so much white folks*” (115).
- ・ 自分は無価値だと思う
- ・ 白人文化に没頭するようになる（特に映画）
- ・ 汚れを嫌う

Chapter② The Ample Sensitivity

〈クローディア〉

- 吐しゃ物を色鮮やかに描写。吐しゃ物を汚くてきれいだと思う独特の感性を持っている
- クローディアの描写からファンクがあると考えられる
- 彼女のファンクの精神によってクローディアは白人文化に抵抗することができた

Chapter③ The Sense of Solidarity

- 〈ピコーラ〉
- ピコーラは家でも学校でも一人であり、コミュニティに属することのできなかった人物
- The Breedloves live in the house which “foists itself on the eye of the passerby in a manner that is both irritating and melancholy” (31).
- ブリードラブ家はボロボロの家に住んでいており、家族で一緒にだんらんの時間を過ごすことはない
- 不当な扱いを受けたことをきっかけにすべてのことに無関心になってしまう
- ピコーラも無関心

Chapter③ The Sense of Solidarity

〈クローディア〉

- コミュニティが大切であるという意識がある（家族間のコミュニティも含む）
- 家がなくなることとは何かの終わりで絶対に避けられるべきことだと教わってきた
- →社会的にマイノリティであるという事を理解したうえでコミュニティがどんなに大切で、守られるべきであるものなのかを教わってきた
- 姉妹で連帯の意識がある

“We’re together. We’ll run if he does anything at us”(74)

→いつも妹のフリーダと協力し、どんな困難にも立ち向かうことができるという意識の反映

まとめ・課題

まとめ

- ピコーラ と クローディア の生い立ちを両親の愛情、ファンク、コミュニティや連帯感の視点で分析した。
- クローディアは決して裕福ではないが両親の愛情やコミュニティなどの環境に恵まれていたことや、独特の感性（ファンク）があったことで彼女自身の思考を深め、行動し、結果的に自己形成することができたのに対し、ピコーラは上記の視点の欠如により自己形成に失敗したと考えられる。

課題

Chapter② ではクローディアのファンクが彼女の行動を引き起こし、最終的に彼女の成長へとつながったと結論付けた。しかし、必ずしもファンクがあることがそのまま成長につながるのかどうかは不明。

Works Cited

- Conner, Marc C. “Extreme Community.” *Bloom’s Guides: The Bluest Eye*. edited and with an introduction by Harold Bloom. Infobase Publishing, 2010, pp. 71-6.
- Morrison, Toni. *The Bluest Eye*. 1970. Vintage, 2019.
- Rosenberg, Ruth. “Seeds in Hard Ground: Black Girlhood in The Bluest Eye.” *African American Review*, vol. 21, no. 4, Winter 1987, pp. 435-45. <https://www.jstor.org/stable/2904114>.
- Roye, Susmita. “TONI MORRISON’S DISRUPTED GIRLS AND THEIR DISRUPTED GIRLHOODS: “The Bluest Eye” and “A Mercy”.” *Collaloo*, vol. 35, no, 1, Winter 2012, pp. 212-27. <https://www.jstor.org/stable/41412505>.
- Willis, Susan. “Eruption of Funk: Historicizing Toni Morrison.” *African American Review*, vol. 16, no. 1, Spring 1982, pp. 34-42. <https://www.jstor.org/stable/2904271>.